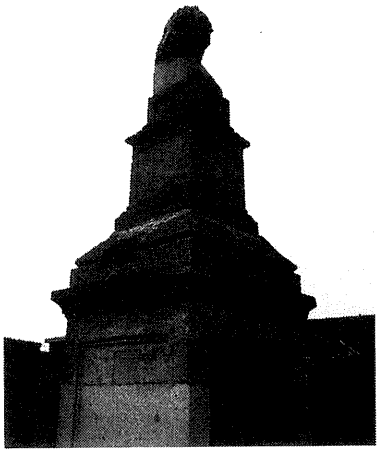
－民族のこころ(139)－

アラビアン・ナイトで村おこし？

小田　淳一



ロッロ村ガラン広場１番地に建つアントワーヌ・ガランの胸像。

フランス・ピカルディー地方の小さな村ロッロRollotは，その名からも推測できるように幾つかの道が交わる田園地帯に位置しており，地勢上の理由からか二度の大戦では隣の国に徹底的にやられている。この村は，アラビアン・ナイト（千夜一夜物語）を翻訳によってヨーロッパに初めて紹介したアントワーヌ・ガランAntoine Gallandが1646年に当地で生まれたこと，またルイ14世が行幸した際に地元のチーズをいたく気に入り，ロイヤルチーズと名乗ることを許したという逸話で知られている。尤も，貧しい職工の末子に生まれたガランは生後数ヶ月で，よりまともな職と生活を求める家族と共に近くの町に引越しており，村の中心部に建つ胸像の頭部は彼の容姿に関する資料が皆無なため想像上のもので，おまけに碑銘の生年が間違っている。ロッロ・チーズの方は，既に村では手作りをやめており，現在では村から約30キロ離れた工場でしか作られていない。

この村への最初の訪問は，取り敢えずどんなところか様子を見に行くことだけが目的で，胸像の真後ろに住んでいる村の親睦団体Comité Rotincia（Rollotのラテン語名）の会長と主要メンバーに挨拶をした。二度目は，胸像建立150周年記念式典に招待されたのだが，年代物の耕運機の陳列がメインイベントらしい収穫祭と併せて開催されたその式典には，ピカルディー地方の人々しか参加していなかった。アラビアン・ナイト特別展のために映像取材を行う民博の撮影隊に同行した三度目の訪問では，我々はとうとう村の宣伝に一役買う羽目になってしまったのである。

その日の朝，Comitéの会長である堂々たるジュヌヴィエーヴ・バイエ女史は，記念式典の時にも着ていた真っ赤な勝負服と念入りな化粧で我々を村庁舎で迎えてくれた。ただ，その装いは我々の取材に備える他に「日本から大々的に取材チームが来る」という情報で彼女が前以て招集した地元メディアのためでもあったようである。その予想通り，村を取材する我々を取材するはずの地元メディアは，結局はバイエ女史の熱心な広報活動を主に取材することとなった。Radio Bleuの支局員やCourrier Picard（地方新聞）の記者に色々と話をしている最中も，バイエ女史はその巨体を割り込ませてきて，話題をComitéの活動に向けてしまうのだった。人口630人の村でComitéが謳っているセールスポイントは，言うまでもなくガランとチーズであるが，真の意味で村おこしに使えるのは最早ガランだけである。にもかかわらず胸像の記念式典にパリから誰も来ないという状況で，日本からやって来た我々は村の重要性をアピールするための恰好の当て馬であっただろう。

1851年にガランの胸像を建立したロッロ出身の医師の末裔で，近くの町で弁護士業を営むドゥブルジュ氏に，ルイ14世に例のチーズを献上した人物の名前があなたと同じなのだがと尋ねると，彼は「実はその人物も自分の先祖の一人で，結局この辺りでは数百年間人の出入りが停滞しているんだ」と教えてくれた。その停滞から抜け出たガランは後年，王室図書館嘱託としてルイ14世のために古銭や写本を中東各地で収集し，古銭学研究の合間にアラビアン・ナイトを訳した後，太陽王崩御の約半年前に亡くなる。ガランとルイ14世とチーズの三題噺に絡みつつ地元に根を下ろしたドゥブルジュ家の現在の当主は，隣国に侵攻された記憶を風化させないことを目的とした「Santerre 14-18」という団体の会長を努めている。